

GREEN EARTH

緑の地球

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

COM21 通巻299号 発行/COM企画室

1992・6

5

- 第1次中国緑化協力団報告…………P 2～
- 渾源県付近イラストマップ…………P 4・5

編集／緑の地球ネットワーク(準)
 Green Earth Network
 大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
 TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739(番552)
 郵便振替 大阪 4-128465



北岳・恒山で油松を記念植樹。日中戦争で
焼かれた山をもういちど緑に /

第2回

自然と親しむ会

●とき／6月28日(日)午前9時45分

河内長野駅(南海高野線・近鉄南大阪線)集合

●目的地／河内長野森林センター・木根館(きん・こん・かん)

間伐材を使った木工に挑戦し、山林荒廃にかかる間伐の問題を学びます。

●お問い合わせは緑の地球ネットワークまで



緑化協力の旅をおえて

石 原 忠一(第1次中国緑化協力団団長)

5月8日、前日の深夜空路入った省都太原で、山西省青年連合会主席支樹平氏に、緑化協力金を手渡し、歓談のあと、青年旅集団のバスで、標高2500mの東台頂を初め5つの峰をこえて、約1000kmの視察の旅は始まった。太原は柳茹のとぶ陽気の中にあったが五台山金閣寺の楊樹はようやく芽が動きはじめていた。

聖地には、楊・柳・榆にまじって、ひとかかえ以上もある油松・雲杉・華北落葉松の古樹が保存され、巨大な古い木造建造物と共にこの地が深い森におおわれた時代があったことをものにしている。

ゆくては世界最大の大黄土地帯、人類の進化と共に地球をけずった氷河時



大きな記念碑にアツと驚いた。
この期待にかならず応えよう！

代、ヒマラヤ・アルプスの北を覆った氷床が進退するごとに堆積した母岩は、風化し熱風にあおられて黄塵万丈この見渡すかぎりの自然を築いた。

ここに栄えた歴史は、樹を伐り、沃野を耕して、大文明社会の榮枯盛衰をくりかえした。

そして今、耕して天に至るまで作物をうえ、背後の岩山を裸にし、さらに山羊や羊の群を追って緑を食べつくし何百年もの時が過ぎようとしている。

道教の聖地恒山を背にした渾源県に到着。11日午後、恒山飯店の会議室で、全行程をつきそった、山西省委の鄧光輝氏、雁北地区委の馬斌書記の手を経て、当地渾源県委員会の李啓軍書記に赤いふくさに包まれた資金が手渡され、「合作緑化捐款転交儀式」と書かれた横幕の前で覚え書きの署名が行われた。

翌日、曹県長みずからバスに乗り込み、温増玉県林業局長の先導で龍窟村の広大な国営中心苗圃を参観し、この地方のアルカリの強い栗鈍土質に適し、乾燥に強い樟子松の2年苗が毎年1000万本ずつみごとに準備されている

のを見、主要舞台の龍首山西留郷へむかう。

ゆるやかに南に傾斜する12万ムー(1ヘクタール=15ムー)の植林地には、巾5m高さ3mの緑色鮮やかな記念碑がたてられ「中日友好交流青年友誼林」と大書されている。斜面に直角に切られた延々とつづく畦の北側に日射と強風をさけるように樟子松の苗が植えられ、活着率85%の成功をおさめている。ひろい地面の空間は松のがびるまで、サダワニと呼ぶ綠肥植物が地をおおっている。この大地が森の樹海におおわれる日を想い、黄土に鍬を入れてしまし一木一草を念入りにしらべた。

北京では全国青年連合会を表敬訪問し、また古くからのおつきあいのあった中国国際交流協会の張香山先生のおまねきをうけたが、先生は地球緑化や、八路軍時代の山西の山々の話に花をさかせながら日本の友人へのあたたかい心を語られた。

中国緑化基金 に ご協力を！

山西省雁北地区の緑化は急ピッチですぐであります。私たちの協力も現地の人びとに大きなはげましとなっています。

1ヘクタールの植樹費用は3万5000円ほどですが、私たちは92年の協力として苗木代金9万元を現地・渾源県に贈りました。およそ35万本分に相当します。

樟子松	実生2年物	5円
カラ松・油松	実生3年物	2円
アンズ	実生3年物	40円
雲杉・側柏	実生5年物	50円
ボプラ	挿木3年物	50円
新疆ボプラ	挿木4年物	250円

恒山では大苗を植樹するため1本250円~800円と苗木代がかさみます。みなさんの中国緑化基金へのご協力をお願いします。

Summer Working Tour

黄土高原に木を植えよう。

8月中国緑化協力団 団員募集！

5月の第1次緑化協力団は、大きな成果をあげて帰国し、山西省渾源県の西留郷・恒山地区の緑化に、具体的なGENの国際協力がスタートしました。

今後の重要な方向として、現地民衆との連帯と理解をいかに深めるかが重要なキーポイントになります。

8月のワーキング・ツアーは、実際の植樹作業に中國の人びとと共に参加することを中心にして、さまざまな民衆レベルでの交流活動を開拓したいと思います。

目的地は、渾源県西留郷・恒山、桑干河青年緑化プロジェクトに含まれる大同県徐町郷等です。

- 期日 1992年8月1日~12日
- 訪問地 山西省渾源県とその付近
- 費用 25万円程度
- 定員 12名(飛行機の座席数)
- 締め切り 定員になりしだい

※船(燕京号/神戸~天津)を利用するコースも可能です。費用は8万円程度安くなります。この場合は北京集合・解散となります。詳しくはお問い合わせください。



加速する渾源県の緑化

緑の地球ネットワーク(準)世話人 高見邦雄

渾源県へむかうバスの窓に、黄土高原特有の風景が見えては隠れる。「耕して天に到る」の言葉どおり、段々畑が段丘の最上部にせまり、そのむこうにいくつも連なる山があり、近くの谷間に井戸水にたよって生活する人びとの村落がある。1月は茶一色の風景だったのに、にじんだように緑がみえる。家の周囲、山の中腹、そして段丘の上部にも、ここ数年のあいだに植えられたにちがいない木々の緑が息づいている。ポプラは薄緑、カラマツはもっとやさしい黄緑、青くみえるのはアラマツ……。

「これは自分たちの仕事だ」(日本人になにができる)といつて前回は山西人の一徹ぶりをみせつけた林業局長が、ニコニコ笑いながら「よく来たなあ」。県長が手をのばして「ガオジエン(高見)はもう県民だよ」。



偶然出会った結婚式の行列。とってもきれいかった花嫁さん。

荷物を部屋にほうりだすと、すぐ町に飛びだす。道ばたのソバ屋さん、鍛冶屋さんにあやしげな中国語で声をかける、乗合タクシーの運ちゃんが恒山ゆきをさそってくる。むこうだってすごいナマリだから、発音がどうだなんて気にすることはない。みかけはいかついけど、ほんとに気のいい人ばかり。プラプラしてたらすぐ横で急ブレーキの音、ジープからおっちゃんが駆け降りてきた。雪のなかを案内してくれた林業局の人が、覚えていてくれたんだ。

渾源県は、風景も人情も最初よりは2度めがいい。3度め、4度めはもっともっと楽しくなるにちがいない。

西留郷の「中日友好交流青年友誼林」にたつ記念碑は高さ3.5m、幅5mはある巨大なもの。私たちの小さな協力には不似合いだが、この龍首山プロジェクトは総面積1万3000ヘクタールで中国一、西留郷だけでも1700ヘクタールの広さ。地元の人びとの「地区全体の緑化を大きく加速しますよ」という期待が込められている。

北岳・恒山の祭は陰曆4月8日(5月10日)。集まった善男善女が6万人というのに、私たちの到着は11日で、「祭りのあと」。中腹の登山道のすぐわきに、中国側



渾源県林業局長の温増玉さん。名前の通りとっても温かい人です(でもガシロです)。

といっしょに全員が参加して記念植樹。息を切らしつつも直径・深さ70センチの穴をほってアラマツの大苗をうえ、金山の緑化を願った。ここにも近い将来、「地球環境林」の記念碑がたつそうだ。

渾源県と緑の地球ネットワーク準備会との緑化協力はすでに具体的にすべりだした。92年の緑化協力資金は、龍首山、恒山というこの地域の代表的なプロジェクトの苗木代になる。

西留郷ではこの春すでに470ヘクタールの植林を終え、夏と秋とでさらに200ヘクタールを植えるそうだ。1月にきいたときの計画をはるかに上回っている。渾源など13の県をたばねる雁北地区の責任者も「今後、協力関係が拡大するなら、自分たちも緑化投資を増額する」とのことだった。私たちの協力がしっかりと認められているのを見て、本当に勇気づけられた。

今後のGENに注目!

第1次緑化協力団報告会を開催

5月29日、港区民センターにて「第1次中国緑化協力団帰国報告会」が行われました。

50名余りが参加しました。参加した人の年齢は15歳から86歳まで、職業も種々様々でおもしろいなと思いました。

団員の一人である高見さんから現地の詳しい状況の報告があり、具体的にビデオで現地の状況を見ることができました。本当に現地の方々の素朴な笑顔と、渾源県の様子がわかりました。

びっくりしたのは、「日中青年友誼

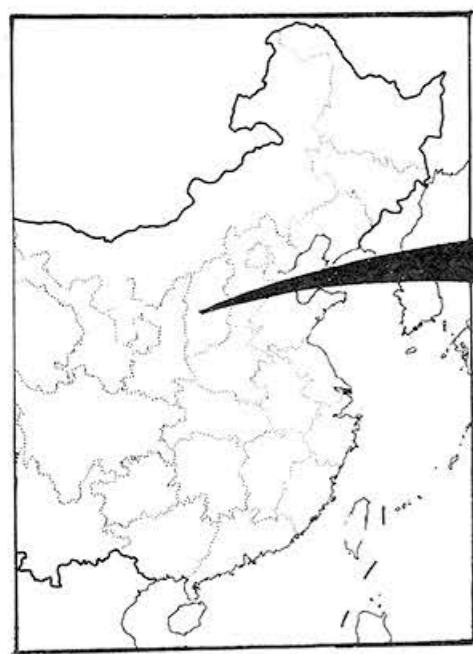
林」の記念碑が現地の方々によって建てられていて、現地の方々の期待の大きさに感動しました。その後各団員の方の報告がありました。そして、思いもかけず中国の沙漠の緑化に生涯をかけられている鳥取大学名誉教授の遠山先生が激励に来られました。私は今まで知らなかった中国の「一人っ子政策」のことを知り驚きました。一日もはやく中国の国民の一人一人が安心して生活できる国になってほしいと思いました。

〔あとがき〕本当に緑化することに



よって、豊かな土地が育ち、豊かな生活ができることが、私たちの願いであると思うので、これから21世紀を世界中が安心して生活できる日をむかえるために今の時を大切にして生きて行きたいなと思いました。そして、これから緑の地球ネットワークに注目しています。(磯川)

渾源県付近イラストマップ



国際協力の第一歩を踏みだしたG.E.N.。第一次中国緑化協力団の団員の感想を紹介します。それぞれの詳細な報告を紙面の都合でかなり圧縮しました。文責は編集部にあります。

五台山あれこれ

副団長

西山五郎
(郵便局勤務)



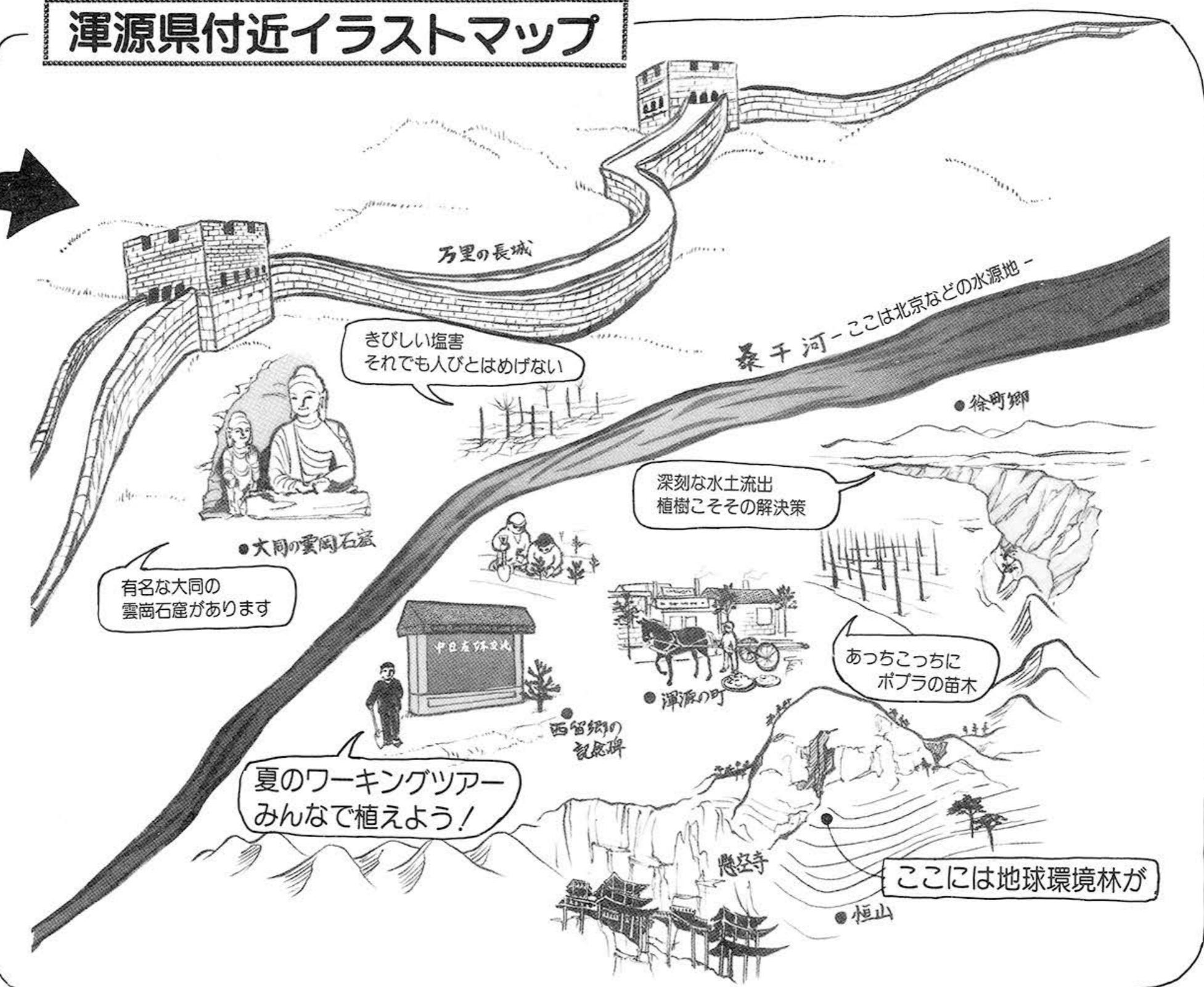
中国の四大聖地の一つ、五台山への旅は、快適なバス旅行になるはずが、風景を楽しんでいると突然、バスが大きくバウンド、天井に頭をぶつけそうになりながら土道を走ること6時間、バスは目的地「台懷鎮」に到着。人口約2000人の小さな村に、古いもので北魏時代(1600年前)まで遡る寺院が47あるとの事。仏教寺、ラマ教の寺、密教寺、道教の寺が仲良く軒を並べている。さすがは中国第一の聖地、善男善女で賑わっている。中国へ来てから、団員以外の日本人と逢わず、さぞかしここでもと思いしや、翌早朝、大型バスで日本人ご一行様ご到着。ああさすがに経済大国日本と感心。ガイドさんに聞くと、年間2000人強の日本人観光客が来るそうです。映画「マンダラ」の影響で増加中とか。

びっくりしたのは、今日10日はお釈迦様のお誕生日で、盛大なお祝いの祭に出くわしたことです。

翌朝、雨が雪になったのか、山々は雪化粧。夏と冬との温度差が60度近い厳しい自然と闘いながら、山を切り開き糧を得、一方では植樹に精を出し、少しでも豊かな生活の為に努力を続ける中國の人々のしたたかさと、逞しさを知る。

私達に何か役立つ事が出来るのか。お叱りを覚悟で申さば、環境を守る、毒を流さない事を前提に、観光に行き金を使うことでしょう。「観光」それは現地を見、現地の人と接する事になる。「金」は苗木となり山を緑にするでしょう。

——石が飛んできた。謝々。



「絶望」は「希望」への一歩

山田孝子
(元高校教員)



「これはもうほとんど絶望的です」ビデオ撮影しながらつぶやく私に、「絶望してはいけません。そこをやり遂げるのです」、力強い声が返った。

大同市郊外の火力発電所から真っ黒な煙が吐き出していた。煙は酸性雨を作りだし、日本にも降り注ぐ。環境問題に国境はない。中国の緑化に協力することはわれわれ自身の環境保全の問題でもある。絶望的ですと投げ出す訳にはいかない。

キラリと輝く 子供たちの目

杉田定志
(獣医)



この度は、私ごときを訪中団に加えてくださいまして、ありがとうございます。

私は1945年まで河北省張家口市にいました。小学校2年生でした。ゆえに、この度の訪中は非常になつかしい気持ちで参加しました。

山西省の黄土高原もなんとかしなければならないのでしょうかが、大同市の火力発電所のあのものすごい煤煙公害もなんとかしなければと思いました。日本に降る酸性雨の一大原因と思われ【次頁につづく】

ます。ただし中國の人たちは公害という認識は無いようです。日本から公害防止技術などを移出することも大切かもしれません、私は教育がもっとも大切ではないかと思います。

除町郷の中学校を訪問しまして生徒たちが貧しい環境で非常に目をかがやかして勉強しているのを見ました。教育はこれですよ、日本は良すぎます。10年、20年後は日本は負けそう！あの中学生たちを少し応援してやりたいと考えている今日このごろです。

黄土高原の「自然」と「人為」

山仲 進

(遺跡発掘調査員)



雁北の印象、一言で言えば「すさまじい」につきる。そして人間の営みとはいっていい何なのだろうかと考えてしまう。故宮（権威）、五台山（信仰）、長城（恐怖）と、人間の心が造らせた巨大な造作物（浪費）。それを支えるため「天」にまで至った耕地。それらの物象のはざまに垣間見える人間と人間との関係。このすさまじきの源が人為なら、一塊の黄土も一つの文明の産物として我々は受け入れなければならない。

恒山で一番目に焼きついているのは、バスで中腹を登って行く途中、深

く切れこんだ谷の向こうの稜線に見えた数段の棚田。一寸でも広い畠を確保しようと、風雨に浸食され岩肌がむき出しになっている以外の土のある所は、本当に天に至るまで耕しつくされ、一本の木もない。人間がいかに自然の循環を無視し、一方的に利用するだけ利用し、自然の恵みに対する感謝を忘れてきたか慄然とさせられた。

今回は恒山の一角に記念植樹しただけで、用意した地下足袋がちょっと寂しそうでした。しかし、渾源で迎えてくれた青年たち、徐町郷の中学生たちのキラキラ輝いた目がとても印象的でした。ものすごい勢いで植樹活動に取り組む青年たち。人為によって生み出された「自然」と、我々や次世代の人びとの「人為」がどう調和できるか、大きな楽しみが浮かびあがってくる。

10年後の徐町郷にもう一度

鳥谷 行俊

(貿易会社自営)



大同県の徐町郷での昼食、飲めもない白酒（パイチュ）に手をだしたのが運のつき。たった一杯で胃も頭も燃え出して、もうたまらない。

食卓をぬけだし外の石垣に腰をおろしていると、村の老若男女百数十名がこっちを見てガヤガヤ。老人と目をあ

都市住民と地元民がスクラム組んで「里山トラスト」運動

昨年の4月、大阪の最北端、能勢町・下田尻の奥登（おく・のぼる）さん所有の山を舞台に、西日本では初めての里山トラスト運動を始めました。

設立の動機は、能勢の貴重な緑を破壊するゴルフ場開発を阻止しようと集まり、意見を出し合っているなかで、「反対と叫ぶだけでは根本的な解決にはならない。能勢のような都市近郊の里山は、経済構造が大きく変革した現在では、『山を守っていけない』現状にあり、この荒れた里山を都会の人と

藤岡 等（能勢里山トラスト「一本の木の会」）

地元の人がスクラムを組んで、手入れをし、守り育てる。こうした地道な活動が、緑を守り、ゴルフ場などの乱開発にブレーキをかけることにつながる」というものでした。

このトラスト運動の大きな特徴は、一見、能勢の山とは無関係にみえる都会の人たちを巻き込むことにありました。能勢の里山は、山菜採りやハイキングなど、都会の人たちの自然とのふれあいの場となり、また、緑豊かな山が良質な水をつくり、都会の人たちに



徐町郷の中学校を訪問

わせ、日本人をみてあの人はどう思うだろうと考えた瞬間、わけもなく胸が熱くなり涙ぐんでしまった。

同行の山田先生と中学校をのぞく。三年生は自習時間で、たくさんの本をだして静かに勉強している。職員室にいくと、黒々と汚れたガリ版が現役で活躍している。あとからきたほかのメンバーといっしょにまた教室へ行く。最前列の女生徒に杉田さんが「勉強は好きですか、大学へ行きますか」と聞くと、即座に「はい、行きます」。そのときの表情、それにあわせてうなづいたクラスメイトたちの顔、どれも日本ではもう見られない光景で、忘れることができない。

広大な中国の、地図にも書かれていよいよ小さな小さな村。校舎も備品も粗末で時代後れだけど、そこにこれほど熱心な若者たちがおり、教育が行き届いている。指導者さえまちがえなければこの国は大丈夫だ、それにひきかえわが日本は、と思ったものです。

あの若ものたちが大人になったときの徐町郷を、ぜひもう一度見てみたい、日本に帰ってから、その思いがいっそう強まっています。

供給しています。山が私有地であっても、公共性のある「共有地」として機能を果たし、その恩恵を受けてきたのは、都会に住む人たちなのだということを訴えました。

私たちの呼びかけに、賛同し、集まってくれた都会の人はすでに100人（家族単位なので実際はその3～4倍）を超えようとしています。

昨年は約2カ月に一度の割りで作業行事を開催しました。松林の柴木の整理、ヒノキの枝打ち、下草刈りなどの山仕事に汗を流しました。参加者は平均して30人から40人。小さい子供を連れた家族連れから、現役を退いたご夫

ひとことメッセージ

まるごとの「自然」を子供たちに

斎藤哲夫(休職中)

東川さん、「木を植えた男」よかったです。4歳の子には少し難しく、長かったようですが、最後まで聞いていました。

虫が苦手で、大騒ぎするのですが、先日、キャンプで野菜炒めの中に黒いものを見つけ、「虫や！」と大騒ぎ。じつは、単なる「こげ」だったので、「虫は美味しいもの、よう知ってんねん。これは虫が食ってるから美味しいで！」と言うと、野菜ぎらいを忘れてパクパク。

その後、スーパーで、傷んだ白菜を見て「これ美味しいん？」。マンガのような話ですが、これでいいんかな？

木が林になり、草が生え虫が住む。そんな一本の木に託して「自然」を、この子たちに残したい。

音楽で人とのふれあいを

矢吹紫帆(シンセサイザー奏者)

先月、京都刑務所での演奏を行なった。受刑者の人も同じ人間という意識をもって演奏にのぞんだが、和気あいあいの雰囲気で想い出に残るコンサートとなった。昔、精神病院でも演奏したが、当初うつむいて入場された人々が踊りだしてこちらもびっくりするや

妻まで、また、職業もマチマチで多彩です。みんなひとつの思いを胸に、電車に乗り、バスに乗り、車で山を越え、集まって来てくれます。

奥さんの山がにぎやかになりました。笑い声がこだまし、枝打ちロボットのエンジン音が響く。都会の人にとっては、枝打ちや下草刈りなど初めての体験です。不慣れな手つきだが一生懸命。自分たちが里山を守るために、何かお手伝いがしたいという気持ちが伝わってきます。しかも、表情はみんな明るい。森林浴をしながら林業体験を楽しんでいます。

昨年の4月から約1年間、山での作

ら嬉しいやら……だった。音楽活動を続ける際、いろいろな方々に励まされたり助けたりしていただいた。私に出来る事は、音楽を通じて何かお返ししていくことだと思って京都刑務所を皮切りに「全国10万人とふれあうコンサート」と題してどんなに小さくても遠くとも楽器をかついで演奏にいくことにした。私一人の力なんて小さな物だが、緑の地球ネットワークにも参加できることが大きな喜びである。人を愛する前に自分を好きになることが大切だと思う。昔は自分が嫌いで人と話すのも苦手だった。今は我家は民宿のようになっていて年齢も職業も様々な人が集まってくる。地球はひとつだという意識を持ち続けたいと思っています。



みんなの力をあわせて

金崎敏博(会社員)

5月29日に帰国報告会が行われ、ビデオや協力団として中国に行かれた方の感想、そして遠山先生の話などありました。ビデオを観て中国の荒涼とした風景など映し出されると、もっともっと緑化を進めていかなければ感じ

業を行ってきましたが、全体から見れば、手入れができたのはほんの一部。山を守っていくことのたいへんさを実感しています。ほかの山の所有者で私たちの活動に興味を持たれている方もおられるようですが、まず、奥さんのトラスト地で、しっかりと実績をつくることが大切ではないかと思っています。

あせらず、根気よく、そして楽しく。能勢の里山すべてに、都会の人たちと地元の人たちの笑い声が飛びかうことを見ています。

能勢里山トラスト「一本の木から」の会・代表/山田久 事務局/藤岡等

GEN 講演会

地球環境を土からみると

松尾嘉郎さんは、「土壤思想普及作家」という肩書で、全国各地をまわって「土」の大切さを訴え続けている。地球環境問題を土からみると、水土流失、沙漠化、塩害などたくさんあります。でも、自然と人間をつなぐ「つち」の役割を私たちはあまりよく知らないのではないでしょうか？

大勢の方の参加を期待します。

●講師 松尾嘉郎さん

(農学博士・前南米コロンビア大学教授)

●とき 7月23日(木)午後6時30分~

●ところ 大阪市立港区民センター

(JR環状線・地下鉄「弁天町」徒歩5分)

●参加費 700円

つつ、自分自身緑化活動に積極的に参加したいと思っています。そして協力団の人の感想で胸に残っているのは大地をただ単に緑にする緑化ではないと言う話で、僕自身もそう思います（昆虫や鳥や獣とそして、人間が共存していく様な緑化でなければならない）。

遠山先生の話で黄土は緑化しにくく、砂漠の方が緑化しやすいとも（プライム10で観たかぎりでは砂漠も大変困難に見えました）。でも困難ですけれど、みんなの力が集められるような会に成るように。最後にGENに期待することは、他の緑化団体との交流や、GEN内の意見交換そして日本国内での緑化活動などしてほしい。

【連絡先】☎0727-37-1667 (藤岡)



会で購入した「枝打ちロボット」。操作しているのは山の持ち主の奥豈さん。

ひとことメッセージ

ナチュラリズムを始めませんか

永園茂樹(広告代理店勤務)

数年前から環境問題が関心を集めていますが、みなさんはどうすることをしていますか。

私たち、緑のネットワークの活動もその一環として、とてもすばらしいことです。でも、日常的にも小さなことから始めてみませんか。

人間は地球上で唯一、自然界の秩序を乱す罪深い存在でしょう?だからこそ私たちの方から、近づいていきませんか。

例えばキャンプに行った時、洗剤や油、ゴミ等で川を汚していませんか。また、むやみに花や草を摘みとっていますか。私も自然遊び大好き人間として、自然を汚すのはもってのほか、花も木も草も懸命に生きているので

す。そのものの身になって考えれば、わかりますよね。地球というすばらしい星に生まれた以上、地球全体が笑顔で暮らせるかどうかは、現在、私たちにかかっているのです。

最近、環境に対していくつかのキーワードが出てきました。地球サミット、地球環境賢人会議、凡人会議、環境税、酸性雨、森林資源調査速報、立木トラスト、アースデー等……思い浮かべるだけで20数種、もっとあるかも知れません。でも名前は知っていても中身はと聞かれると?となる方が多いと思うのですが……。森林問題では東欧の方が特にひどい様で、チェコ等では60%以上の木々に葉が喪失するという被害が報告されています。私たち、緑のネットワークもその一助になればと願っています。

私たちも「みんなでやれば恐くない」をいい方に向けて、個々が地球に、みんなに優しくなる、そんな素敵を願っています。

ナチュラリズムと一緒に始めませんか。

【編集後記】

■梅雨の季節となり、先日田舎(徳島県麻植郡・吉野川中流域)に帰った。田植えも終わり、夜になるとカエルの合唱、朝はにわとりの鳴き声で目覚めるという、なんて季節感があるんだろうと思い、また裏山におじいちゃんが植えてくれた梅の木から梅を収穫し、そして竹林からたけのこをおじさんがとってくれて、さっそく家に帰り、おいしく頂き、なんて幸せな一日なんだろうと思いました。(磯川佳子)

■会員のみなさんこんにちは!たくさん的人が集まれば、本当に色々なことができますね。今回イラストマップを担当してそう思いました。次回の会報には是非あなたも参加してみてください。いっしょにネットワークを拡げましょう。(祖谷公子)

核燃料輸送情報非公開の目的は 反原発運動の抹殺だ!

小林圭二

(京都大学原子炉実験所)

科学技術庁は、4月18日、核燃料物質の輸送日時、経路など輸送に関する情報を今後不特定多数の者に公表しないよう、原子力事業者およびそれらの存在する14の都道県6市町へ要請した。この「要請」(事実上の強制)は、沿道住民が生命の安全をみずから守る当然の権利だけでなく、広く、国民の知る権利、表現の自由、さらには集会や示威行為の権利までも奪う重大な内容をふくんでいるので注意をよびかけたい。

世界は今、核兵器廃止の方向へ動い

ており、核兵器への転用につながるプルトニウムの保有や使用をやめようという方向にある。しかし、日本だけは世界の動きに逆行して、プルトニウムの大量保有、全面利用の道をつづっており、まもなく高速増殖炉「もんじゅ」用プルトニウム燃料の国内輸送が始まろうとしている。今秋には、海外に再処理を委託していた原発使用済燃料からのプルトニウム返却が開始される。このような日本のプルトニウム利用推進政策は、世界の厳しい非難的となっている。今回の輸送情報非公開化は、核物質防護(核兵器開発につながる核燃料盗難等の防止)を口実に、そのような世界からの非難をかわす目的でうち出された。

世界の非難は日本のプルトニウム政策自体に向けられているのに、この措置は、その矛先を、筋違いの国内輸送問題にそらそうとしている。そればかりか、「要請」の付属説明文を読むと、この

措置に便乗して反核燃輸送運動そのものから反原発運動自体まで抹殺しようという真の意図が露骨にうかがえる。

まず、秘密化の対象をプルトニウム輸送だけでなく、核兵器にはなりえない低濃縮の通常の原発燃料を含む全ての核燃料物質へ拡げていることだ。また、これまでの反核燃輸送運動を「妨害行為」と断じ、核燃料盗難行為と同一視することによってすりかえ、これを「未然に防ぐことが必要」だと記している。仕上げは、「原子力の平和利用を進める上で大きな障害となる」と、反原発運動自体が悪だと言わんばかりだ。

表現の自由、集会示威行為の自由、知る権利など人間の基本的権利を侵害するこのように重大な政治的措置が、国会で議論されることもなく、官庁による一ぺんの「要請」によって強行されようとしている。反原発運動にかかる人たちだけの問題でないことは明らかだ。全ての人々に、核燃料輸送情報秘密化反対の声をあげ、科技庁、事業者、沿道自治体等への追及など具体的運動の展開を呼びかけたい。



核燃料物質の輸送のようす